

---

# 廃水

坂田火魯志

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

廃水

### 【Nコード】

N5044I

### 【作者名】

坂田火魯志

### 【あらすじ】

ある工場で作業員達が次々と消えていく。それに危険なものを感じた工場長はすぐに調べることが命じる。すると出て来たものは現代ホラーです。

## 第一章

### 腐水

その工場はとにかく忙しかった。工業化を推し進め発展している国はどの場合でも多忙なものであるがその工場はその中でもとりわけ多忙であった。

まさに一日とて休まる暇はなくその一日も長い。夜を知らず朝も知らない。そうした極めて多忙な中で人々も働いているのだった。

「忙しい忙しい」

「言っても仕方ないけれどな」

愚痴は出るがそれでも身体は自然に動く。中で働く労働者達も殆ど機械になっている。そうして汗と油にまみれて働き続けるのだった。

工場の中では人々が働きその中で動き続けていた。とにかく忙しく出すものもなおざりになってしまっていた。

「とりあえず流せ」

工場長はこう言うだけだった。

「河に流してしまえばそれでいいからな」

「わかりました」

排水やそういったものは次々と河に流される。真っ赤な排水が流されそれが河を不気味に染める。しかしそれを見つめる者は誰もおらず働き続けている。とにかく多忙だったのだ。

しかしその中においてだった。工場の中である噂が聞こえていた。そしてそれは実に奇妙な噂であった。

「水が動いた!？」

「ああ、そうらしい」

「水が動いたんだよ」

こういう話であった。

「工場から出す排水が動いたらしい」

「水は流れるものだろう？」  
その話にすぐに反論が為された。  
「それだと動いて当然じゃないか」  
「なあ」  
「いや、違うんだよこれが」  
しかしそうではないというのだ。  
「水がな。何か変に動き回るんだよ」  
「変に？」  
「そうらしい。それで魚を取り込んだりしてな」  
「まさか。そんなことがある訳ないだろ」  
「なあ」  
だがこの言葉もすぐに否定される。これまた、というように。  
「けれど本当に動いてな」  
「魚だけじゃなくて川辺にいた生き物も襲って」  
「おい、それって嘘だろ」  
「そんなのってよ。ないだろ」  
「ないか、やっぱり」  
「そうだよ。それってな」  
「それじゃあ化け物だろ？」  
皆その噂を信じようとはしなかった。  
「そんな話よ。有り得ないだろ」  
「水が魚とか食うかよ」  
「なあ」  
この話は最初は一笑に伏された。しかしそれでも噂は消えず  
どころか徐々に大きなものになっていた。噂は川の中だけでなく  
工場の中にも及んできていた。  
「えっ、工場で何か動いていたのかよ」  
「ああ、そうみたいだぜ」  
「赤いドロドロとしたものがな」

この話が為されるのだった。工場にいる工員達の中で。

「蠢いているってよ。何かな」

「そういえば排水が動いてるって噂あったよな」

「それが外に出て来たのかよ」

「こう考えが及ぶのは当然の流れだった。」

「しかもこの中にかよ」

「そんなの嘘だろ」

「またそれは否定されるのだった。」

「そんなのはよ。有り得ないだろ」

「排水のあれでも信じられなかったのによ」

「皆この話も否定した。しかしやがて工場の中で実際に異変が起るようになってきていた。」

「柳沢君がいなくなった？」

「はい、そうなんですよ」

「工場長に対して工員が述べていた。」

「何か。トイレに行くって言って急に」

「いなくなった？」

「はい、ロッカーの荷物はそのままです」

「これがまた実に奇怪にだ。」

「受け持ちの作業場の道具もそのままでしたし」

「おかしいな」

「工場長はここまで話を聞いて首を傾げるのだった。」

## 第二章

「柳沢君に限ってそんな急にいなくなるなんてな」

「そうですよね」

彼は真面目な青年として通っていた。その為工場の中でも工場長にも非常に評判がよかった。だからこそ余計に首を傾げるのだった。

「一体どうしたんでしようか」

「とりあえず探そう」

工場長はこの時代は深刻には考えていなかった。

「それでいいな」

「はい、それじゃあ」

こうして柳沢が探されることになった。しかし彼は見つかなかつた。そのまま行方不明になってしまった。誰もがこのことに首を捻るがこれに終わらなかつた。

次の日にもまた一人。いなくなってしまったのだ。

「今度は後藤君がか」

「朝来て着替えに行つてです」

「タイムカードは落としてか？」

「はい、そうです」

また工員達が工場長に述べていた。やはり誰もが首を傾げてしまふことだった。

「いないんですよ、そのまま消えて」

「おかしいな」

工場長はまた首を傾げるのだった。

「柳沢君はまだ見つかつていないんだな」

「下宿にも帰っていません」

彼のアパートにもだつた。

「鍵はかかったままで中を覗いても」

「いないか。何なんだ？」

「それで後藤のバイクも置いたままですし」

「柳沢君は自転車だったな」

「それも置いたままです」

謎はさらに深まるのだった。

「おかしいですよね」

「だとしたら二人はまだ工場の中にいるのか？」

工場長はこう首を捻るのだった。

「ひょっとして」

「そうですね、やっぱり」

「間違つて溶鉱炉に落ちたのか？」

工場長は考えられる限りの最悪の事態を考えだした。

「若しかしてだが」

「いえ、二人はそっちの受け持ちじゃなかったですし」

工員の一人がこう彼に述べた。いつもは機械の音が音楽になっている工場の中が異様に静まり返っていた。それは鳴り響いてはいるのだが誰も耳にも入らなくなっていた。

「それにあそこの作業は常に数人でやりますよね」

「ああ」

そのことを工場長が知らない筈がなかった。それだけ危険な作業だからだ。

「立ち入りにもチェックしますし」

「じゃあ溶接炉はないか」

「絶対にはいりません」

こうしてそれは否定されたのだった。

「それだけは」

「そうだな。そもそもトイレに行ったり着替えに言つて溶接炉になんか向かったりはしない」

「そうですね、それは」

「それにですよ」

もう一つ溶接炉に落ちた可能性が否定される話が出された。

「柳沢がトイレに行った時間溶接炉動いていなかったし」

「そういえば昨日は溶接炉は使っていなかったな」

「それで止めてましたから」

「そうだったのだ。」

「今日だって今やっと火を衝けたばかりですし」

「朝早くなんてとても」

「そうだな。やっぱりそれもないか」

工場長は腕を組んでまた思索に入った。

「何なんだ？それじゃあ」

「わかりません、けれど二人は見えません」

「何処にも」

「もう一度探してみるか」

工場長はとりあえずはもう一度探してみることにするのだった。

「何処かに倒れているかも知れないしな」

「そうですね。それじゃあ」

「もう一度」

こうして彼等はまた捜索に入った。だがそこでだった。また一人  
だった。



### 第三章

「今度は方状君がか」

「はい、またです」

「探していて何時の間にか」

「三人目か」

工場長はそれを聞いて深刻な顔にならざるを得なかった。

「これで。しかも探している人間がか」

「当然溶接炉には落ちていません」

「というよりですよ」

工員達は焦り狼狽した顔で工場長に話す。その言葉が今の状況を何よりも雄弁に物語っていた。

「一緒に探している人間が方状から目を離したらですよ」

「俺です」

その一緒にいた工員が言ってきたのだった。

「俺が振り向いたらもうです」

「いなくなつたのか」

「はい、本当に気付いたらです」

「何なんだ」

工場長は今度は溜息だけでは済まなかった。

「三人か。しかも急に消えた」

「何かあるんですか？若しかして」

「この工場に」

「それはわからないが」

工場長もここまではわからない。わかる訳もなかった。

「しかしだ。おかし過ぎる」

「そうですね、僅か二日で三人ですよ」

「行方不明なんて」

「それだ。そうだな」

「ここで工場長は真面目な顔になり。そうして工員達に言うのだった。」

「ここはだ。一人での行動は慎むことだ」

「一人ではですか」

「さっきのは振り向いたらもういなくなっていたんだな」

「そうです」

語るのはその時の相方だった。彼は言う。

「本当に一瞬だったんですよ、一瞬に」

「一瞬か」

工場長はそれを聞いてまた考える顔になった。コンクリートと鉄筋で造られた工場の中で不気味な緊張が漂い続けていた。

「一瞬で消えたんだったな」

「そうなんですよ。ただ」

「ただ？」

「何か匂いが残ってました」

ここで彼はこうも言うのだった。

「何か強烈な酸味臭が」

「酸味臭が」

工場長はその言葉を聞いてまた考える顔になった。

「この工場にそんな薬品は置いてないんだがな」

「ですよ、硫酸とか塩酸は」

「そんなのはちよつと」

「そつだ。それでその臭いか」

不審に思わずにはいられなかった。そんなものが工場にないのはわかっているからだ。それでその臭いがしたということがわからないのだ。

「おかしいな」

「ですよ、やっぱり」

「何なんでしょうか」

「とりあえず一人での行動は駄目だ」

工場長はまたこのことを皆に告げた。

「いいな、常に何人かで行動することだ」

「わかりました、それじゃあ」

「そういうことで」

とりあえずはこういうことになった。工員達だけでなく工場長もまた数人で行動することになった。そうして何人かで行動していたがそれでも。次の日にはまた行方不明者が出ってしまったのである。

「今度は木村君がか」

「はい、トイレに行ったらその中で」

「消えていました」

「今度はトイレか」

工場長はそれを聞いて再び苦い顔になった。

「トイレは一人になる。とはいってもだ」

「はい、俺達がいきました」

「ちゃんと」

その木村という男と一緒にいた工員達が工場長に話す。

「それでもです。大の部屋に入ったら」

「もうそれですぐに」

「トイレでまでか」

工場長はここでまたわからなくなってしまった。

## 第四章

「姿が消えるのは」

「あつ、そうです」

「それです」

ここでその木村と一緒にいた工員達が工場長に話してきた。強張って怯えたような顔になっている。その顔で話すのであった。

「酸っぱい臭いですけれど」

「それですよね」

「それがしたのか？」

「はい、そうです」

「その通りです」

彼等はこう工場長に述べた。

「その臭いがしました」

「木村が消えた用足しの部屋に」

「そうか」

工場長はその話を聞いて目を顰めさせた。そうしてそのついで工員達に言うのだった。

「とりあえずそのトイレに行こう」

「トイレにですか」

「そうだ、何か手懸かりがあるかも知れない」

「こう言うのである。」

「だからだ。それを見つける為にな」

「わかりました。それじゃあ」

「すぐに」

こうして工場長と工員達は木村が消えたその用足しの部屋に向かった。そこにはやはり誰もいない。和式の便器とトイレットペーパー、それに水槽があるだけだ。そうした何処の便所にあるそうしたものがあただけである。やはり何の変哲もない便所であった。

「おかしなところはないですね」

「もう臭いもしないですし」

「水槽の中も」

工員達はその便所の水槽の中も調べていた。そうして他の場所もだ。

それでもやはり何もなかった。何一つとして見つからなかった。皆それを調べ終わって首を傾げずにはいられない。だがここでふとあるものが見つかった。

「工場長、これは」

「何だ？」

「ほら、これです」

一人が木村が消えたその用足しの部屋の片隅を指差した。そこにあるのは赤い何かの水のようなものだった。それがあつたのだつた。

「何ですかね、これ」

「うんこじゃ何かじゃないのか？」

「それにしちやおかしくないですか？」

工員はこう彼に首を傾げながら言った。

「こんな色のうんこなんて。病気ですかね」

「それにこんなところですか？便器じゃなく」

「ちよつとないですよね」

「そうだな」

言われてみればそうだった。工場長も工員達の言葉に頷く。

「じゃあ一体」

「わかりません。けれど何か」

「やけに粘り気がありますよ」

今度はこう言うのだった。その水のようなものを見ながら。

「ゼラチンのゼリーみたいですね」

「何なんですかね、これって」

「さてな。とりあえず拭き取っておくか」

あまり大したものには思えずとりあえず拭き取るうとした。だが

ただ拭き取るだけではない。

「あとはこれを調べるか」

「これをですか」

「ああ、ひよっとすると手懸かりかも知れない」

こう工員達に言うのだった。その水のようなものを見ながら。

「だからな。拭き取ってだ」

「わかりました。それじゃあ」

「そうして」

こうしてその水を拭き取ることにした。しかしであった。

「えっ!?!」

「何っ!?!」

皆それを見て目を丸くさせた。何と拭き取るうとしたトイレットペーパーが見る見るうちに消えていったのだ。白い煙をしゅうしゅうと出しながら。

「な、何だこれは!?!」

「硫酸か何かか!?!」

「硫酸!?!」

ここで工場長の頭の中で結びついたものがあった。

「まさか」

「まさか!?!」

「何かあります!?!この水に」

「まさかと思うが」

工場長もまだ確かなものは持てなかった。

## 第五章

「だが一応調べてみよう」

「わかりました。それじゃあ」

「この水を」

こうしてその水が調べられた。わざわざ本社の方から学者が招かれそのうえで調べられた。学者は髪がぼさぼさで髭だらけの顔のむさ苦しい男だった。彼はフケだらけの頭を掻きながら述べるのだった。その間も警戒は続いていたが幸いにして失踪者は出なかった。

「この水はですね」

「どうなんだ？」

「ちよつとおかしいですね」

「この工場長達に答えるのだった。」

「ちよつとどころじやないですけどね」

「ちよつとどころじやなくおかしい？」

「どうということなんですか？」

「これは排水ですよ」

学者は工場長達に対して述べた。

「工場からの」

「工場のか」

「ええ。ですがこの排水は強い酸性を持っています」

学者はこのことを指摘した。

「この工場から強い酸性なんてそうそう出ませんよな」

「それはないと思う」

工場長は首を傾げながら彼に答えた。

「この工場では鉄筋やそうしたものを使っているが」

「そうですね。化学薬品なんて作っていませんし」

「そうだ。だからそんなものはそう派手に出たりはしない」

工場を預かっているからこそわかることだった。彼はこの工場の

ことは誰よりもわかっていると自負していた。言つならば船の船長のようなものだ。

「それはない筈だ」

「しかしトイレで見つかったんですよ」

「そうだ」

「このことも確認された。」

「その通りだ。事実だ」

「ええ、そうです」

「工場長の仰る通りです」

「ここで工員達も真面目な顔で学者に述べるのだった。」

「それは俺達も見ていましたし」

「その通りです」

「それが余計にわからないんですよ」

「学者はまた首を傾げさせて述べた。」

「何でこんなものがこの工場のトイレに？」

「それだな。わしもわからん」

「工場長はまた首を傾げさせた。」

「俺もです」

「どうしてうちの工場のトイレにこんなものが？」

「ええと、そういえばですね」

「学者はふと話を変えてきた。」

「この工場について聞いた噂ですけれど」

「あつ、はい」

「何ですか？」

「何か工場の近くの河から奇妙な噂があったそうで」

「ひよつとしてあれですか？」

「あの排水が魚や動物を食べてたつていう」

「工員達もこの話は知っていた。信じてはいなかったが。」

「それですか？」

「けれどあれは」



「ええ、私もそんな筈はないと確信しています」  
学者はこうも言うのだった。

「ですがそれでもです」

「それでも？」

「一応。河も調べてみますか」

彼は今度は河の水を調べると言うのだ。

「河の水もね。とりあえずは」

「河の水をか」

「はい、調べてみます」

工場長に答えて今度は河の水を調べるのだった。そうしてその結果わかったことは。

「同じでした」

「同じ？」

「はい、トイレに残っていた赤い水と」

また工場長と工員達に対して話していた。

「河の排水は全く同じ成分でした」

「そうなのか」

工場長はそれを聞いてまずは眉を顰めさせた。

「同じだったのか」

「それですね」

学者はさらに言ってきた。

「実際に魚が全くいなくなっています」

「河の魚がか？」

「はい、しかも川辺には虫もいませんでした」

それもだというのであった。虫までもが。

「奇麗に。一匹も」

「そんなことがあるんですか？」

「まさか」

「勿論そんなことは有り得ません」

学者もそれは否定した。有り得ないことだと。

## 第六章

「だからこそおかしいのです」

「しかもうちの工場も何人も消えている」

「関係がないと思われませんか？」

「そう思わない方がおかしいだろう」

工場長はいぶかしむ顔で学者に言葉を返した。

「ここまで話が出て」

「そう思われますね、やはり」

「うむ。それではだ」

工場長はまさかと思いながらそのうえで学者に対して己の考えを告げた。

「あれか。消えた工員達は排水によって溶かされた」

「排水が動き回って」

「しかも骨も何も残さずか」

「そうです。何も残さずです」

学者は言葉を続ける。

「そういえばですね」

「うむ」

話は続く。得体の知れない不気味なものを感じながら。

「最近工場の中でゴミとか生き物はいますか？」

「あれっ、そういえば」

「急にいなくなったよな」

「なあ」

皆ここでそのことにふと気付いたのだった。

「鼠どころか蜘蛛とか小さい虫もな」

「全く見なくなったな」

「しかもな」

疑問点はもう一つ出て来た。

「生ゴミ。全然ないよな」

「なくなったな、そういえば」

「だよな」

「そうですか」

学者はここまで話を聞いてまた述べたのだった。

「では本当にまさかと思えますが」

「排水が動き回ってそれで？」

「食べているとか？」

「私もそれはないと思っています」

学者はあくまで現実的な視野から語っていた。この辺りは実に理系の学者らしい。

「ですが。あまりにも話が出来過ぎています。そしてそう考えることがかなり自然です」

「それではだ」

工場長はここまで聞いてそのうえで再度述べてきた。

「まさかとは思うが」

「はい」

彼もまたこう前置きしたうえで話すのだった。

「これからのことを考えるとしよう」

「それでどうされますか？」

「まずはこれまで通り何人かで固まって動こう」

これは忘れなかった。

「一人でいるより何だかんだで安全だからな」

「そうですね。それがいいかと」

学者もまた彼の言葉に賛同して頷くのだった。

「あと密室には入らないことですね」

「そうだな。それもだな」

今度が工場長が学者の言葉に対して頷く。逆にはなっているがそれでも話していることに対するやり取りや導き出される答えは同じであった。

「そうしていいこう。ではだ」

「ええ」

「とりあえずはそうやってですよね」

「工員達も工場長の言葉に対して応えるのだった。」

「何が出て来てもいいように」

「警戒ですね」

「そうです。そしてです」

「学者がここでまた知恵を出してきた。」

「まずは自分達の身はそうして守って」

「それだけではないんだな」

「そうです。それでです」

「また工場長に応えながら言葉が続けてきた。」

「後は餌を用意しましょう」

「餌!？」

「そうです。生ゴミも減ってるんですよね」

「学者が今度言うのはまずはここからだった。」

「生ゴミも。そうですよね」

「ええ、その通りです」

「そういえば噂が出てすぐに物凄い減りました」

「ではそれで決まりです」

「学者はここまで聞いて確信したように頷いた。」

## 第七章

「餌を置いておきます」

「罨か？」

「はい、まずは罨です」

また工場長の言葉に対して答えるのだった。

「まずは。生ゴミに毒や睡眠薬を混ぜておきましょう」

「そんなものが効果があるのか？」

「それはわかりません」

しかしここでは学者の返答は今一つ以上に弱いものであった。

「実際に効果があるかどうかは。相手が本当に排水から出るものならです」

「普通の生命体ではないかも知れないからか」

「そういうことです。その場合はまた考えますが」

返答は今一つ以上に弱いものであった。

「ですが餌を置いておけば必ず食べに来る筈です」

「その時に相手の姿も見てか」

「そういうことです。まずは相手が何者か確かめましょう」

「よし、わかった」

工場長は学者の言葉をここまで聞いて確かな顔で頷いた。

「ではそれで行こう。まずはな」

「はい、それで」

こうして最初にやることが決まった。彼等は固まって行動し密室には入らずそのうえで工場のある場所に適当に生ゴミを置いておいた。工場長達はその生ゴミを離れた場所から見のだった。

「それでだ」

「はい」

「本当に排水なのか？」

「廃水でしょうか」

学者はこう工場長に答えた。彼等は生ゴミから離れた場所においてそこから見ているのだった。

「若しかしたら」

「廃水!？」

「調べたら成分はそう言っているいいものでした」

「こう工場長に対して述べるのだった。」

「あれは」

「廃水か」

「そうですね、排水というよりはです」

「廃水か」

「ですから余計に悪質です」

学者の言葉がここで苦々しいものになった。表情こそ変えないが。

「何かを溶かしたりするのも速いので」

「それでか」

「そうですね。もっとも本当に何かわかるのはこれからですが」

「そうだな。本当に何なんだ？」

工場長は顔を思いきり顰めさせながら呟いた。

「何人も行方不明にさせてくれて。何なのだ」

彼はこのことに深い怒りを感じていた。工場を預かる者としてだ。工員達は彼にとってたまさに弟であり息子であり。その家族を奪われた怒りを感じていたのだ。

「若し見つけたらだ」

「どうしますか？」

「人間なら仕方がない」

「ここで仕方がないという言葉が出た。」

「警察に突き出してやる」

「人間なら、ですか」

「それ以外の存在だったら容赦しない」

そして今度はこう言うのだった。

「この手で成敗してやる、絶対にな」

「そうするのが宜しいかと。それではです」

「待つんだな、このまま」

「何につけてもそれです。今は」

こうして彼等は暫く待った。そうして待っているとだった。不意に上の方から何から降りてきた。見ればそれは赤いどろどろとした液体だった。

「あの液体は!？」

「間違いありませんね」

「ああ、間違いない」

工場長は覗きながら学者の言葉に対して応える。二人は同じようにして覗いていた。

「あの赤い水だ」

「ですね。あの水です」

学者もまたそれに応えて述べる。

「あの水ですよ、あれは」

「どうしてあんなものが出て来るんだ？」

工場長はあらためてこのことを呟かすにはいられなかった。

「やはり。あれは」

「ええ、かも知れませんがね」

ここで二人の言葉は完全に合わさっていた。

「これはね。あれですね」

「まさか本当にそうだったとは」

「私も信じられません」

むしろ学者の方が驚いていた。そんな言葉だった。

## 第八章

「こんなことが実際にあるなんて」

「わしもだ。しかし出て来たのは」

「はい」

紛れも無かった。今日の前に出て来ていた。

「間違いありません」

「その通りだな」

今その水は完全に生ゴミの中に降り立った。そうして床の中に消える。するとそこにあつた生ゴミは瞬く間に消えてしまったのであつた。

「消えた!？」

「いえ、違いますよ」

学者が工場長に対して告げてきた。

「見て下さい、あそこです」

「あつ、あそこか」

「はい、まだいます」

見れば水は床の隅にまだいた。すぐに別の場所に移っていたのだ。そうしてそこからずるずると壁を這って上にあがり。そのまま天井の方に消えてしまったのだった。

それを見届けてから学者は。工場長に対して言うのだった。

「見ましたよね」

「はつきりとな」

工場長も強張った顔で答える。

「あれか。今まで工員を失踪させていたのは」

「認めたくないですがそうですね」

学者の言葉もまた強張ったものであつた。

「あれですよ」

「どうする?」



そして工場長は今度はこう言うのだった。

「あれは。どうするべきだ?」

「それは決まっています」

学者は工場長に対してすぐに答えた。彼等はまた物陰に隠れている。そうしてそのうえでひそひそと話し合っていた。あの廃水をまだ警戒しているかのように。

「倒すしかないです」

「やはりな。それしかないか」

「このままあれを放置していたらどうなります?」

学者は真剣な顔でこのことを問うてきた。

「その場合は。どうなりますか」

「このまままた工場の工員達があの化け物に喰われてしまう」

廃水をこう呼んだ。彼の中では廃水はもう化け物だった。

「またな」

「その通りです。勿論その中には私達もいますし」

「だからこそだな」

工場長もまた同じだった。彼の中でも答えは一つしかなかった。

「退治するしかないな」

「その通りです。まずは工員の人達にまた集まってもらいましょう」

「そうするか」

こうして彼等はまた工場の中にいる面々を集めた。そうしてそのうえで廃水のことを話しどうするべきかということもまた話すのであった。

「まさかとは思いましたけれど」

「化け物だったんですか!?!」

「この騒ぎの犯人って」

「そうだ、わしもまだ信じられないがその通りだ」

工場長は暗い顔で工員達に答えた。彼等は今工場の会議室に集まってそのうえで話をしている。やはり廃水を警戒するようにしてだ。

「この目を見た」

「私もです」

工場長だけでなく学者も言う。

「見ました、はっきりと」

「じゃあ間違いないんですね」

「その赤いどろどろとした廃水が俺達をですか」

「一刻も早く何とかしないと次に喰われるのは我々だ」

工場長の言葉には危機が深くあった。

「何とかな。それでどうするかだが」

「まず相手は廃水です」

学者がまたこのことを一同に告げる。

「意志があり動くようですが」

「だからまずいんですよね」

「しかも人を襲って喰うし」

「ですが知能はないようです」

学者はこのことを見抜いていた。

「言うならアミーバと同じです。知能はありません」

「ないんですか？」

「じゃあ本能だけですか」

「知能があればああした形にはなりません」

こう一同に話すのだった。己の考えているところを。

## 第九章

「ですから畏やそういったものには弱い筈です」

「畏には弱い」

「それじゃあ」

「そうだ、畏だ」

ここで工場長の声はつきりとしたものになった。

「畏で相手を倒すぞ。いいな」

「畏ですか」

「けれどなあ」

「それもな」

しかしここで今度は工員達の顔が曇った。そうしてそのうえで顔を見合わせ口々に言い合うのだった。

「この工場にそんなものあるか？」

「化け物を倒せるような」

「方法がないわけではありません」

しかしここで学者が言うのだった。

「相手は廃水です」

「それはわかってますけれど」

「それでも。どうやってやっつけるんですか？」

「畏っていいますけれど」

工員達はいぶかしむ顔になっていた。そうしてそのいぶかしむ顔で学者に対しても口々に言ってきた。何も思いつかないといった顔で。

「そんないきなり出て来て喰うような相手に」

「どうするんですか？」

「当然普通の畏じゃ駄目だ」

また工場長が彼等に話してきた。

「普通のな。ここは特別な畏を仕掛ける」

「特別なですか」

「そうだ。特別な罨だ」

このことをあえて強調するのだった。

「特別なな」

「そんな罨ありましたっけ」

「この工場に」

「罨は何処にもありますよ」

しかし学者は落ち着いた声で彼等に告げた。

「それこそ何処にでも」

「何処にでも!？」

「この工場にそんなのありましたっけ」

「ないよな」

「なあ」

工員達はまた顔を見合わせて怪訝な顔になる。しかしそれでもどうしても思い当たるものがなくいぶかしむしかできないのだった。

「あんな化け物を倒せるような」

「そんなものないですよ」

「ですから相手は水です」

学者の言葉は落ち着きを失っていないかった。

「水ですから。ですから」

「そこに何かあるんですか？」

「水だから」

「そうです。つまり蒸発させればいいのです」

これが彼の廃水を倒す方法だった。今度は方法を語ったのだった。

「蒸発させるのです。廃水を」

「蒸発っていうと」

「水を蒸発させるっていうと」

「熱すればいいですけど」

「熱ですか」

工員達も工場にいればわかることだった。これは。話は理科の授

業にもなっていた。しかも初歩的な。

「ボイラーとかそういうのなら一杯ありますけれど」

「ここは鉄使ってますからね」

「そう、鉄だ」

ここで工場長がまた彼等に言ってきた。

「鉄を溶かしたりするな」

「じゃああれですか？」

「溶接炉ですか？」

何人かがこの存在に気付いた。

「それが罫ですか」

「そうなんですか、やっぱり」

「あれならまず水でも何でも蒸発させることができます」

「鉄でも溶かす位だ」

工場長も言う。

「廃水ならな。絶対に大丈夫だ」

「はい、だからです」

学者も答える。

「あそこが一番です」

「よし、後は誘っただけだな」

「そうですね。相手は知能はないんですよね」

「だったらそのまま」

「ただしです」

しかしここで学者の言葉が変わった。色が深刻なものになったのである。

## 第十章

「畏の中身が重要ですが」

「重要っていいいますと？」

「何かあるんですか？生ゴミじゃないんですか？」

「はい、それも用意はしますが」

それだけではないというのである。

「もう一つ用意するものがあります？」

「！？」

「何ですか、それって」

工員達は話を聞いても首を捻るばかりである。しかし学者はその彼等に対して述べるのだった。

「つまりです。私達です」

「私達！？」

「っていうと」

「はい、私達が囿です」

こつ首を傾げる工員達に対して述べた。

「私達自身が囿となっております」

「廃水を誘うんですか？」

「まさかとは思いますが」

「いえ、そのまさかです」

しかし学者ははつきりと答えるのだった。

「そのまさかですよ。本当に」

「あの、それはかなり」

「危険ですよ。下手しなくても喰われますよ」

工員達はその顔を強張らせてそれぞれ彼に対して言ってきた。

「そうしたら元も子もないんじゃない？」

「違います？」

「ですがそれでもです」

それでも彼は言うのだった。学者らしく合理的な、そうして全てが計算済みだという感じのする言葉で。だからこそ説得力のある言葉ではあった。

「我々はです。そうしなければなりません」

「命を賭けるんですね」

「つまりは」

「その通りです。如何でしょうか」

あらためて彼等に告げた。

「それで誘き出して一気に焼きます」

「確かに危険だがな」

工場長もここで言った。

「しかしやる価値はないか？」

「やる価値はですか」

「廃水を倒すだけの」

「このまま何もしないでいてもやがて皆廃水に喰われてしまう」

工場長が今話したのは何も空想的なものではない。現実である。

あくまで現実でありそうやって実際に何人も喰われている。これは工場にいる誰もがよくわかっていた。

「そうになりたいか？」

「そうなりたくないから今ここに集まってるんですけど」

「そうですよ」

答えはもう出ていた。

「じゃあ。仕方ないですね」

「俺達が困になってですね」

「既に河の魚や川辺の生き物、それに工場の生ゴミや虫に鼠達は完全にいなくなっています」

学者の今度の言葉はそれが廃水によるものであることをはっきりと伝えていた。

「後は私達だけです」

「確実に襲い掛かってきますか」

「それにそれだけのものを吸収してきたならば」  
話はまだ続くのだった。

「その大きさはおそらくかなりのものになっているでしょう」

「大きさもですか」

「じゃあ本当に化け物みたいになってるんですね」

「その通りです。だからこそです」

学者はまた言った。

「ここで私達が困らなくてもやりましょう」

「では早速かかるぞ」

最後に工場長の言葉がかけられた。こうして彼等は溶接炉の周りに生ゴミを置いた。そうしてその溶接炉のすぐ側に集まりそのうえで廃水が来るのを待つのがだった。

「いいですか？」

学者がスタンバイしている工員達に対して告げる。彼と工場長もまた現場にいる。溶接炉のすぐ側にいてそこから下を見下ろしている。溶接炉は巨大な窯でありそこにはもうマグマの如き火が燃え盛っていた。それはまるで煉獄の炎であった。邪なものを焼き尽くす。

「廃水が来たらです」

「ええ、わかってます」

「すぐに上に避難ですね」

「廃水は間違いなく生ゴミに襲い掛かります」

その周りに置いている生ゴミにだ。

「続いて私達に向かいます」

「俺達にですね」

「そして喰おうってわけですか」

「そこを逃げて一気にです」

彼は言葉を続ける。



## 第十一章

「溶接炉の火で焼きます」

「それはわかりましたけれど」

「物々しいですね」

「そうですね、わざわざこんなものまで付けて」

見れば彼等はそれぞれ何かに乗っていた。それは簡易リフトであった。それを工場の天井に付けてそこに彼等に乗せているのである。

「廃水から逃げる為っていつても」

「物々し過ぎじゃないんですか？」

「用心には用心を重ねるべきだ」

しかしここで工場長が彼等に告げた。

「充分過ぎる程度にな」

「だからですか」

「それでここまで」

「そうだ。だからだ」

工場長の言葉は真面目なものだった。

「ここはな。すぐに避難できるようにだ」

「命綱も忘れないで下さいね」

学者は彼等の腰にあるそれについても言った。

「それもいいですね」

「ええ、それももう」

「忘れてませんか」

工員達はすぐに彼の言葉に答えた。彼等のうちで勇敢な者達が溶接炉の前にそうやって装備して立っている。他のメンバーはその溶接炉の周りで何時でも動けるようにしている。

「何時あいつが出て来ても逃げられるように」

「操作も頼みますよ」

「それはわかってるからな」

「任せておけよ」

何かの機械の前にいる工員達が仲間達に対して応える。

「何かあつたらすぐに動かすからな」

「心配するな」

「よし、皆頼むぞ」

工場長自身は学者と共に溶接炉を動かす装置の前にいる。

「要はタイミングだ」

「はい、その通りです」

学者が彼の言葉に真面目な顔で頷く。

「タイミングさえ合えばそれで廃水を」

「そうだな。逆に言えばタイミングを外せば」

ここで工場長はあえて逆のことも言ってみせた。

「全てが終わるといふことだ」

「その通りですね。本当にタイミングです」

「とにかくだ。もうすぐ来る」

工場長はこのことを本能的に察していた。

「覚悟はしておくか」

「はい、是非」

皆固唾を飲んで相手が来るのを待っていた。そうして遂にであった。その廃水が来たのだった。どろどろとしたものが上から現われそうして生ゴミを吸収しだした。その不気味な汚らわしい赤い色はまさしくあのトイレにあった水そのものだった。それ以外の何者でもなかった。

「水か？」

「間違いない、あれだ」

困役の工員達はその不気味な姿を見て言い合った。それはまさにアメリカであった。極めて原始的な生物のそれに見えるものだった。

「水だ、あの」

「じゃあやっぱりこれまでの事件は」

「あいつの仕業だな」

「そうですね」

それを見て工場長と学者も言葉を交えさせる。

「あの時生ゴミを吸収していた奴だ」

「やっぱり出て来ましたね」

「いいか」

ここで工場長はリフトのスイッチのところにいる工員達に顔を向けて告げた。

「焦るな」

「タイミングを間違えるなってことですね」

「リフトをあげるタイミングを」

「早過ぎては向こうが気付く」

その廃水のことだ。

「知能はないが感覚はあるからな」

「その通りです。感覚は間違いなくあります」

学者もここで言う。

「感覚はです。ですから」

「気付く」

その通りだった。

「気付かれたら終わりだ。だからだ」

「そうですね。だからこそです」

学者もリフトのスイッチの側にいる彼等に告げた。

「タイミングは間違えないで下さい。いいですね」

「わかりました」

「それじゃあタイミングだけは」

彼等もまた固唾を飲んでいて。そうしてそのうえで身構えていた。そのタイミングが来ても何時でも動けるように。そして間違えないように。

## 第十二章

「間違えないようにして」

「何時でも」

「来るな」

廃水はその生ゴミを食べ終えた。そうして次第に囿の工員達の方に近付くのだった。

「来た！」

「遂に！」

「だがまだだ」

しかしここで工場長は言った。

「リフトの動きは早い。いいな」

「ええ、わかつてます」

「だからこそですね」

「焦るな」

スイッチのところにいる工員達にまた告げた言葉だ。

「絶対にだ。焦るな」

「はい、それじゃあ」

「ここは絶対に」

「まだだ」

工場長は彼等の言葉を聞きながらタイミングを見ていた。廃水は次第に近付いてきている。

「まだだぞ、いいな」

「あと少しですね」

「そうだ。少しだ」

学者に対しても応える。彼もまたタイミングを見計らっていた。何時でもできるようにだ。タイミングを見計らい緊張の中に身を置いていた。

そして廃水が来た。それを見て彼は。遂に叫んだのだった。

「来たぞ！」

「はい！」

「今ですね！」

「そうだ、スイッチを入れる！」

工場長はスイッチのところの工員達に対して叫んだのだった。

「今だ！」

「わかりました！それでは！」

「スイッチオン！」

実際にスイッチが置かれた。その時廃水は驚くべき速さで床を這つてきていた。あと少しで囿の工員達を飲み込もうとしたその時にスイッチは押され彼等のリフトがあがった。

それで囿の工員達は何とか助かった。廃水は彼等を飲み込むことはできずそのまま空を飲むだけであった。しかしそこに感情は見えない。

「助かったな」

「ああ、間一髪だったな」

囿役を務めていた行員達はここで胸を撫で下ろしたのだった。

「もう少し遅かったらな」

「いいタイミングだったぜ」

そしてスイッチのところにいる同僚達に笑顔を向けるのだった。

「おかげでな。助かったぜ」

「おうよ、上手くいってよかったぜ」

「何とか助かったな」

「よし、後はだ」

「今です」

今度は彼等の番だった。学者が工場長に告げた。

「今こそ溶接炉を」

「動かすぞ」

「どうぞ」

学者はまた彼に告げた。

「今こそこの炎で」

「よし、行けっ！」

工場長はまた叫んでボタンを押した。すると溶接炉の窯が動きそのうえで中にある炎を出すのだった。炎はマグマそのものどろどろとした状態で廃水の上に落ちた。

廃水はそれにより瞬時にして消え去った。しゅうしゅうと白い蒸気を出して消え去った。これで全ては終わったのであった。

「終わってみれば一瞬だな」

「ええ、確かに」

誰がどう見ても廃水はそれで完全に消え去った。後には何も残ってはいなかった。その赤いマグマが急激に冷えていつているだけであつた。

「これで終わりです」

「やれやれといったところか」

工場長はここで大きく息を吐き出したのだった。

「何人も犠牲にして。これでな」

「終わりですね、本当に」

学者もまた終わりだと言つた。

「後始末は残っていますが」

「そうだな。しかしだ」

ここで工場長は首を傾げさせてきた。

「何故だ？」

「何故といますと？」

「どうしてあんなものが出て来たのだ？」

彼が言うのはこのことだった。

「あんなものが。どうしてだ？」

「そうですね」

彼の言葉を受けて学者は考える顔になった。そうしてそのうえで答えるのだった。

「あくまで仮定ですが」

「うん、その仮定は？」

「今我が国は必死に工業化を押し進めています」  
学者はまずこのことを言うのだった。

「それで公害も出ていますが」

「ではこれも公害なのか？」

「おそらくは」

こう話すのだった。このことは今次第に言われだしていたのだ。工業化を推進すればどうしても起こってしまうことなのである。

「その結果の一つでしょう」

「しかし。水が意識を持つのか」

工場長はそれでもこのことは考えられなかった。あまりにも馬鹿げた話にしか思えなかった。これは彼の常識の中での考えである。

「そんなことが有り得るのか」

「有り得るでしょう」

学者は首を捻りつつまた工場長に述べた。

「私も今までこんなことはないと思っていましたが」

「考えが変わったとでもいうのかね？」

「はい、その通りです」

彼の返答だった。

「まさか。こんなことが」

「そうか。やはりないか」

「はい、有り得ないことです」

彼はまた述べたのだった。

「本来は。ですが実際に起こりました」

「そうだな。実際に起こった」

このことを話す。どうしても否定できない現実だった。

「それではな。否定できないな」

「その通りです。そして何人も死んだ」

それが余計に現実であることを教えていた。人が死ぬこと程現実を表すことはない。それで嘘だとは学者にも工場長にも言えなかつ

たし思えなかつたのだ。

「ですから」

「世の中は常識では語りきれないこともあるか」

工場長はその蒸発してしまつた廃水がこれまでいた場所を見て呟いた。

「それが今だな」

「そついうことです」

これが現実だつた。実際に廃水が動きそつして何人も喰われてしまつた。水が意識を持つこともある、何かを汚せばそれは必ず汚した者に帰つて来る、そついうことだろうか。

廃水 完



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5044i/>

---

廃水

2010年10月8日14時27分発行